

日中国交正常化45周年記念
国際アジア共同体学会東アジア共同体会議

「一帯一路構想からアジア環境エネルギー協力の道」

開催のねらい

「これほど大きな国内問題に直面している国が、簡単に対外的軍事衝突に出たり、世界支配に出たりはしない。・・・中国は、自らの国家的命運を自国自身で解釈し、それを追求し、その経済を発展させ、アジアとそれを越えた広大な利益を追い求め続けるだろう。」

Henry Kissinger, On China, The Penguin Press, 2011

「欧州統合は『石炭鉄鋼共同体』の創設から出発した。北東アジア地域統合は『石炭と鉄鋼』を『グリーン技術とグリーンエネルギー』に置き換えることで始まる。」

韓昇珠韓国首相、2009年5月

21世紀情報革命下で、パクス・アメリカナが終焉し、アジア力の世紀が到来しています。トランプの登場と「一帯一路（陸と海のシルクロード）構想」の展開が、その新世紀の到来を象徴しています。

私たち国際アジア共同体学会は、2008年朝日ホールで「岡倉天心と東アジア共同体」をテーマに国際会議を開催して以来、ほぼ隔年ごとに東アジア共同体会議を開催してきました。今回、日中国交正常化45周年を記念し、日中関係の再構築を図り、アジアの未来を議論し構想する国際シンポジウム開催のねらいは、以下の三つに集約されます。

第一に、45年前の1972年9月29日、周恩来首相と田中角栄首相との間で交わされた日中共同声明の原点に立ち返って、アジアの平和と繁栄をつくる日中関係の枢要性を再確認し、その再構築をいかに図るかを議論し構想すること。

第二に、第2次大戦終結後の1947年、米国主導のマーシャル・プランが欧州復興の起点となり、欧州石炭鉄鋼共同体と、欧州地域統合の構築につながったように、冷戦終結後の今日、中国主導の一帯一路構想がユーラシア大陸復興の起点となり、いかにして日中関係再構築の道につなげるのか、それを、環境とエネルギーを軸に“地域協力の制度化”、つまり地域統合とつなげる基本構想を議論し、その具現化の道を示すこと。

第三に、アジア環境エネルギー協力の道を、一国単位の政策論議に終わらせることなく、国境の壁を超えた繁栄と平和の政策シナリオの中の位置づけ直し直ししながら、その担い手を、国家政府だけでなく、産業界や自治体との連携下に進める途を模索し構築すること。

つめていえば、不毛な軍事抑止や軍事同盟の強化ではなく、生産的で経済社会的な協働関係の構築によって、東アジアの危機を、平和と繁栄の道につなげていくことです。

45年前の日中国交正常化の水先案内人キッシンジャーがいまも警告し続けるように、勃興する中国や“追い詰められた”北朝鮮を、狭い“脅威論”のディストピアで捉えるのではありません。45年後の今、パクス・アメリカナが終焉し、アジア力の世紀が台頭する中で打ち出された一帯一路構想の中に、アジア環境エネルギー協力の構築を繋げる、“共生”のリズムによってとらえ返すことです。

シルクロードの東端、平城京に始まる「この国のはじまり」に想いを馳せて

国際アジア共同体学会会長 進藤榮一